

林 重雄<sup>1</sup>: 福井県美浜町へのアカウミガメの漂着

Shigeo HAYASHI<sup>1</sup>: Stranding of the loggerhead turtle, *Caretta caretta*, on the beach of Mihama-cho, Fukui Prefecture, Japan

日本近海に生息するウミガメ類には、アカウミガメ、アオウミガメ、オサガメ、タイマイ、ヒメウミガメの5種が知られている(石井 1999)。アカウミガメ *Caretta caretta* は、爬虫綱カメ目ウミガメ科アカウミガメ属に分類され、本種のみでアカウミガメ属を形成する。本種は、太平洋・インド洋・大西洋・地中海の熱帯および亜熱帯海域に広く分布し、日本には東北地方の近海にまでやって来る。日本近海は本種の北太平洋における主要な産卵場で、産卵記録は福島県以南の太平洋岸、および石川県能登半島以西の日本海岸にある。(中村・上野 1963; 富田 2007)、今回本州中部の福井県で幼体の稀な漂着を確認したのでここに記載する。

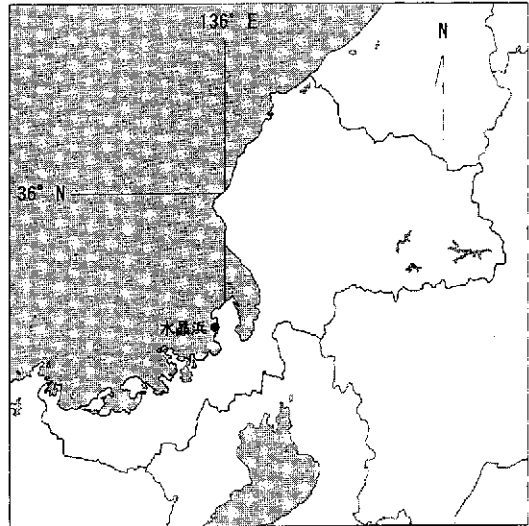


図1 福井県美浜町水晶浜の位置。

漂着記録

筆者は2011年2月11日、福井県美浜町水晶浜で漂着物の調査中にアカウミガメを採集した。水晶浜は敦賀市から西北へ10kmほどに位置し、敦賀半島の西側にあたる(図1)。この一帯の海岸は花崗岩質の岩礁と、花崗岩質の粗粒砂からなる砂浜である。水晶浜の西側は海に面し、秋から冬にかけ季節風が吹き出すと、漂着物が寄り集まりやすい場所である。

発見時(午後0時)の天候は晴れ、気温4℃、北北東の風、風速1.3m/sであった(気象庁ホームページ)。アカウミガメは水晶浜の低潮線の上に、ホンダワラ類などと一緒に漂着しており、漂着後間もないものと思われた。採集直後のアカウミガメの直甲長は101.2mm、直甲幅は92.4mm、重量は186gであった。アカウミガメの外観は、ほとんど損傷を受けておらず、退色や腐敗は認められなかった(図2)。

また表面にはフジツボ類とエボシガイ類の付着も認められた(図3)、フジツボは主壁表面が滑らかで、中

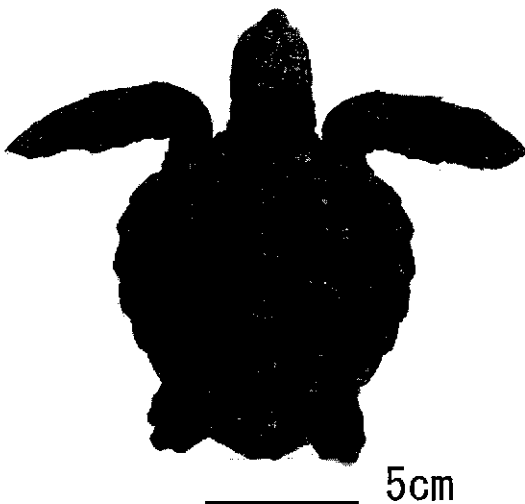


図2 アカウミガメ *Caretta caretta* 背面。

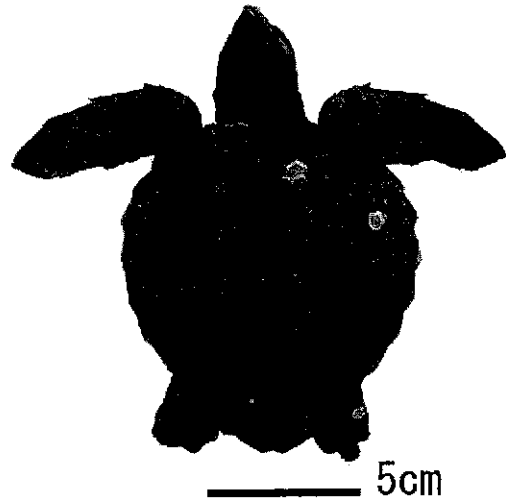


図3 アカウミガメ *Caretta caretta* 腹面に付着したコスジェボン *Conchoderma hunteri* と、サラフジツボ *Platylepas hexastylus*。

央に明瞭な溝が見られる特徴（林 2009）からサラフジツボ *Platylepas hexastylus* と同定した。またエボシガイ類は、背板が「へ」の字状に湾曲し、峰側線が弓状になっている特徴（弘 1937）からコスジエボシ *Conchoderma hunteri* と同定した。

なお、水晶浜ではココヤシ、ゴバンノアシ、シナアブラギリ、シロツブ、ハマナタマメ、モダマ、マルミワニグチモダマといった南方系植物の種子や果実の漂着が確認されており、2010年1月2日には甲長90mm程度のアカウミガメも漂着が確認されている（兼田幸生ブログ）。

## 考察

発見前日の2月10日、水晶浜に近い美浜の気象データは、平均気温2.3℃、平均風速3.3m/sであった（気象庁ホームページ）。また2月9日における敦賀湾周辺の表層水温は9℃を示し（海洋情報部ホームページ）、アカウミガメは海水温の低下などで衰弱し、漂着したものであろう。

アカウミガメの飼育下における成長は非常に早く、直甲長は孵化後3ヶ月でおよそ2倍の90mm以上になる記録がある（奄美海洋展示館ホームページ）。日本国内でのアカウミガメの産卵は5月頃から始まり（日本ウミガメ協議会ホームページ）、そのため少なく見積もっても、自然環境下における成長で直甲長が101.2mmならば、2010年に孵化した個体と推定できる。日本海には対馬暖流が流れ込んでおり、日本の南方で2010年に孵化した個体が回遊してきたものと推定される。

アカウミガメ幼体の表面には、大きなものでは直径が10mmほどに成長したサラフジツボ *Platylepas hexastylus* が、腹甲部といった硬質部だけでなく軟質部にも付着していた。このことは孵化後の回遊海域に、サラフジツボのキプリス幼生が浮遊していたと推測できる。また、頭状部が10mmほどのコスジエボシ *Conchoderma hunteri* が腹甲部に付着しており、これまでに付着が知られていたウミヘビ類やタイワンガザミ（弘 1937）以外での付着例となり、付着対象がより広範囲に及ぶ可能性を示唆している。

筆者は2000年から定期的に福井県下の海岸で漂着物調査を続けてきたが、2000年から2009年までアカウミガメ幼体の漂着を確認していない。しかし、2010年12月から2011年1月にかけて、福井県下では直甲長が100mm未満のアカウミガメ幼体4個体の漂着が確認された（福井市自然史博物館・丸山私信 2011）。こうした報告例は、ビーチコーマーによる観察例の増加だけではなく、繁殖例の増加、海水温の上昇や、対馬暖流の流入量の増加に伴う回遊も、影響しているものと推測できる。今後も調査を続け、今後アカウミガメ幼体の漂着や随伴する生物に注目することで、アカウミガメと付着生物の生態や地理分布についての新たな知見が得られるであろう。

**謝辞：**本稿をまとめるにあたり、福井市自然史博物館動物研究室の丸山紗知氏には、福井県下におけるウミガメ類の漂着情報を頂いた。倉谷うらら氏には論文の入手でお世話になり、フジツボ類の同定にあたって貴重な助言を頂いた。北海道教育大学札幌校の鈴木明彦教授には、粗稿を見ていただき、貴重な助言を頂いた。匿名の2名の査読者からは、論文の改善に役立つ貴重なご指摘をいただいた。ここに記してお礼申し上げる。

## 引用文献

- 奄美海洋展示館ホームページ。 (<http://www.synapse.ne.jp/kaiyo/>)  
 第八管区海上保安本部 海洋情報部ホームページ。 ([http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN8/sokuho/sokuho\\_index.html](http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN8/sokuho/sokuho_index.html))  
 林 亮太 2009. ウミガメ類・クジラ類に特有に付着するフジツボ類（オニフジツボ超科）の形態と日本での産出記録。 うみがめニュースレター-81：2-16  
 弘富士夫 1937. 日本動物分類，第9巻，第1編，第5号，完胸目I，116pp. 三省堂，東京。  
 石井 忠 1999. 新編漂着物事典，380pp. 海鳥社，福岡。  
 兼田幸生ブログ.流れ物通信 (<http://kinkin.mitelog.jp/>)  
 気象庁ホームページ。 (<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)  
 中村健児・上野俊一 1963. 原色日本両生・爬虫類図鑑，214pp. 保育社，大阪。  
 日本ウミガメ協議会ホームページ。 (<http://www.umigame.org/top.html>)  
 富田京一 2007. 日本のカメ・トカゲ・ヘビ，180pp. 山と溪谷社，東京。

(Received July 1, 2011; accepted July 30, 2011)

<sup>1</sup> 〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町 3-155

<sup>1</sup> 3-155 Toriimatsu-cho, Kasugai City, Aichi 486-0844 Japan